

## カタクチイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し (2007(平成 19)年 8 月～12 月)

対象海域：北薩～道東。

対象漁業：まき網、定置網、船曳網。

対象魚群：0 歳魚(2007(平成 19)年級群)、1 歳魚(2006(平成 18)年級群)、および 2 歳魚(2005(平成 17)年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

### 1．西薩～常磐南部のシラス(船曳網)

(1)来遊量：西薩、志布志湾では前年を上回る。日向灘では前年を上回る。豊後水道では前年並みか前年を上回る。伊勢湾～駿河湾では前年並み。相模湾では前年を下回る。常磐南部では不漁で前年を下回る。

(2)漁期：全期間。

### 2．北薩～紀伊水道外域(まき網、定置網)

(1)来遊量：北薩・薩南海域では好調であった前年を上回る。日向灘では前年を上回る。豊後水道では前年並みか前年を上回る。土佐湾から紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2)漁期：全期間。

(3)魚体：日向灘は 12cm 以下の 1 歳魚と 0 歳魚、北薩、薩南、豊後水道は 10cm 以下の 0 歳魚主体。

### 3．伊勢湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1)来遊量：伊勢湾～伊豆半島東岸では好漁であった前年並み。相模湾では前年並みか前年を下回る。

(2)漁期・漁場：伊勢・三河湾、渥美外海、駿河湾では全期間。相模湾は 8～9 月中心。

(3)魚体：伊勢・三河湾、渥美外海は 5～10cm(0 歳魚)主体に 10～13cm(1 歳魚)が混じる。駿河湾～相模湾は 10～13cm(1 歳魚)主体。

### 4．房総～道東(まき網、定置網)

(1)来遊量：前年を下回る。

(2)漁期・漁場：1 そうまき漁場は 11 月下旬～12 月に三陸南部から順次常磐北部、常磐南部、鹿島灘、犬吠埼周辺に形成される。道東のまき網は 9～10 月。仙台湾～三陸の定置網は全期間。常磐の小あぐり・房総沿岸の 2 そうまきは全期間。

(3)魚体：常磐の小あぐり、房総の 2 そうまきは 7～11cm 台の 0 歳魚主体。1 そうまきは 12～13cm 台の 1 歳魚主体。三陸の定置では 12cm 前後の 1 歳魚主体、道東のまき網では 8～14cm の 0～2 歳魚。

## 漁況の経過(2007(平成 19)年 1 月～6 月)および今後の見通しについての説明

### 1. 資源状態：

カタクチイワシ太平洋系群の資源量推定値は 1998(平成 10)年から 2006(平成 18)年まで 90 万～150 万トンで推移している。水準は過去 20 年では高位、経過は 5 年間で減少傾向にある。本系群は漁場が形成され

る沿岸だけでなく黒潮親潮移行域まで広く分布している。

2005(平成 17)年級群は、2005 年 6~7 月の北西太平洋沖合域の表層トロール調査(東北水研)による体長 10cm 未満の分布量で 2004(平成 16)年級群を上回った一方で翌 2006 年 6~7 月の調査では体長 10cm 以上の分布量が 2001 年以降で最低水準であった。しかし 2005 年の房総沿岸のジャミセグロ漁況が好漁であったこと、2005 年 9~10 月の道東まき網漁獲物、同年 9~10 月の道東~三陸沖の中層トロール調査(東北水研)でも 0 歳魚時点で採集されていたこと、2006 年 4~6 月の房総以北での漁況および 9~10 月の道東まき網が 2001 年以降で中程度であったことから、近年の中では中水準であったと考えられる。

2006(平成 18)年級群は、常磐・房総沿岸では 2006 年 10~11 月に 0 歳魚としての漁獲が少なく、道東海域では 9~10 月に 0 歳魚として漁獲されたが前年には及ばなかった。また 2007 年 2 月に常磐・三陸沖で行われた中層トロール調査(中央水研)では、調査時の海況の影響もあるがカタクチイワシの推定分布密度は 2002 年以降で最も低く、2006(平成 18)年級群と思われる小型魚も少なかった。また 2007 年 6-7 月の北西太平洋におけるトロール調査で 10cm 以上のカタクチイワシの分布量が 2001 年以降で最低であったことから、近年の中では低水準であると考えられる。

2007(平成 19)年級群は、1~6 月の本州太平洋岸における産卵量が 6,065 兆粒であり前年同期(4,307 兆粒)をやや上回り、過去 10 年間の同期の平均(7,073 兆粒)をやや下回る水準であったが、紀伊水道を除く太平洋岸の各地において 1~6 月のシラスは前年並みか前年を上回る漁況で、東日本でのシラスは総じて 1997 年以降で最高の漁獲量となった。また 6~7 月の北西太平洋におけるトロール調査で 10cm 未満のカタクチイワシの分布量が 2001 年以降で最高であったことから、近年の中では中~高水準であると考えられる。

## 2. 来遊量、漁期・漁場、魚体：

### (1)西薩~常磐南部のシラス(船曳網)

西薩・志布志湾では春漁が過去 5 年平均を上回り好調であった。日向灘における黒潮の変動予測は不漁になる条件ではなく、6~7 月の中型まき網の漁場も沿岸域であるため、日向灘沿岸への加入条件が良いと推察される。豊後水道(佐伯湾)では親魚(2006(平成 18)年級群)の漁が低調であり、前年のシラス漁獲量との相関関係も考慮に入れると不漁の前年並みか上回る程度と予測される。土佐湾では下半期のシラス漁は 11~12 月の漁で大きく左右されるため予測が困難である。伊勢湾および渥美外海では未成魚が多く、シラスとして豊漁であった春生まれの 2007(平成 19)年級群が産卵に加わるのが予測期間の後半と考えられるため、来遊は前年および過去 10 年平均並みと考えられる。遠州灘から駿河湾では 6 月下旬~7 月中旬の漁況が低調であるものの、卵・仔魚の出現状況と海況予測から、過去 5 年平均を上回り前年並みと考えられる。相模湾では卵の分布量から、好漁であった前年を下回り過去 10 年平均並みと推測される。常磐南部では例年の盛漁期である 8~9 月の黒潮流路が B 型と予測されることから不漁で前年を下回ると考えられる。

### (2)北薩~紀伊水道外域(まき網、定置網)

北薩および薩南海域では、周辺海域でのバッチ網漁業が好調であることから、好調だった前年を上回ると考えられる。日向灘では、今期は春季に大型群の来遊が少なく 12cm 未満の小型群主体で 5~8 月が盛漁期となるパターンであると推定されるため、5~6 月の漁況経過から前年を上回ると考えられる。豊後水道

では1歳魚(2006(平成18)年級群)が前年の1歳魚を下回り、また春シラスの漁況から0歳魚(2007(平成19)年級群)が前年の0歳魚を上回ると考えられるため、総じて前年並みか前年を上回る程度と考えられる。土佐湾から紀伊水道外域では未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではないため、まとまった漁獲は無いと考えられる。

### (3)伊勢湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

伊勢湾および渥美外海では、今後の漁獲の主体となる0歳魚(体長5～10cm)がパッチ網漁獲物中に高い割合で見られ、春シラスの漁獲量も平年を大きく上回ったことから過去10年平均を上回り好漁であった前年並みとなると予測される。駿河湾～伊豆半島東岸では3月以降の伊豆東岸定置網、4月以降のまき網ともに過去5年平均を上回っていることから、比較的好漁であった前年並みと予測される。相模湾では上半期の漁況経過から前年並みか前年を下回ると予測される。

### (4)房総～道東(まき網、定置網)

2005(平成17)年級群は主たる漁獲対象とはならない。2006(平成18)年級群は2005(平成17)年級群を下回り近年の中では低水準にあると推定されるが、北部太平洋区まき網による本年4～6月の漁獲物は1歳魚(2006(平成18)年級群)と2歳魚(2005(平成17)年級群)半々で前年同期の176%の漁獲があった。しかし、今後の漁獲の主体となる2006(平成18)年級群は沖合での分布が少ないことから、常磐・房総海域における予測期間中の漁獲は前年並みか前年を下回ると推測される。

常磐・房総海域における1そうまきの主漁場は、1～3月前半は常磐南部から犬吠埼海域に、その後6月まで犬吠埼周辺に形成された。近年の推移から、1そうまきの漁場は8月以降同海域では形成されず、南下期は11月下旬～12月に三陸南部から順次常磐北部、常磐南部、鹿島灘、犬吠埼周辺に形成されると考えられる。1そうまきでは1歳魚(2006(平成18)年級群)が漁獲の主体となり、常磐の小あくり、房総沿岸の2そうまきでは0歳魚(2007(平成19)年級群)および1歳魚(2006(平成18)年級群)が主体となる。魚体サイズは6月現在の漁獲物の体長にその後の成長を加味して推測した。

宮城県における4～6月までの漁獲量は、定置網を主体に2,508トンで前年同期の34%であった。体長組成のモードは4月上・中旬で9～10cm、4月下旬から5月中旬で12～13cm、5月下旬で10～10.5cmと12cm、6月は12cm主体であった。

渡島の定置網の漁獲量は4～6月で1,020トンであり、前年(1,449トン)を下回った。釧路水試が6月26日～7月5日に道東～三陸沖太平洋で北辰丸により実施した流し網調査では、CPUEは1,668.7尾/回で前年(897.9尾/回)を上回り、1994年以降で5番目に高い値であった。しかし同調査における魚体は9.5～14.5cm台で13cm台が主体で、秋季に漁獲の主体となる2006(平成18)年級群の資源量は2005(平成17)年級群より低く、また沖合での分布も少ないことから、夏季以降の道東海域へのカタクチイワシの来遊量は前年を大きく下回ると考えられる。